第二十九回日本保育学会「幼稚園創設百年記念公開座談会」より

一九三〇年代の実践を語る

菊池ふじの

皆様こんにちは。本年は女子高等師範学校、今のお茶の水女子大学に附属幼稚園が創設されて百年、そのうちの四十年を私はこの幼稚園でご厄介になったのでございます。それでこの度だけはこの会への出席をお断りできないだろうと、しぶしぶ今日まかりでました次第でございます。

一九三〇年前後の実践者としてという課題をいただきましたのですが、私がここの幼稚園に就職しましたのは、一九二四年、大正十三年でございます。一九三〇年と申しますと、昭和五年でございますね。そんなことを考えまして、その頃自分がやったこと、また私のお勤めしておりましたここのお茶の水幼稚園全部で皆でやったことをお話し申し上げます。

私が幼稚園の先生になった時、はじめの二、三年はもう自分の組のことだけしか考えられませんでしたが、少し経験を重ねてまいりますと、少し視野が広くなって、幼稚園全体を考えるようになりました。その当時、一般の幼児教育界では、いろいろなさっていらしたんですが、そういうことは、あまりおぼえておりません。まったく井の中の蛙でございました。研究会とかそういうものも、当時はございませんでした。のんびりとお子さんと一緒に遊んでいられたので、たぶんに幸せだったとも、一方では考えております。

私は女高師の三年の時から倉橋惣三先生に、家庭教育と児童心理のお講義をうかがいました。先生のお講義は大変に興味深く

て、私は先生を非常に尊敬いたしました。いろいろの点で先生から目を開いていただきました。私が学生の時代には教育の学説として、ジョン・デューイの学説とか、ダルトン・プランの話とかをうかがって、心から共鳴し共感しておりました。

卒業いたしまして幼稚園に奉職いたしました大正十三年には、園舎はすっかり丸焼けになっておりまして、お粗末なバラックが漸くできあがっておりました。机とか椅子、砂場、ジャングルジムとかブランコ、そんな最低限のものがあった程度でございました。先輩の、あるいは前にいたお子さんの作品とか、そういう歴史を物語るものは何もなかったのでございます。それに私の性格がおっちょこちょいなものですから、なんにもそういう以前のこと、周囲のことは考えず、ただ、倉橋先生のお議義で聞いておりました、「子どもたちに目的を持たせよ。そうすれば子どもにネセシティーを感じさせて、子どもたちは乗ってくる」というお言葉を心の中心におきました。ですから、いろいろ考えて、子どもたちに興味のあることを提案し、それをクラスのテーマとしました。あとで誘導保育という言葉が倉橋先生によってつけられましたが、私は、就職のはじめから、そのようなテーマを考えて、クラスの子どもたちと一緒にやって参りました。

思い出しますと、お茶の水のあの聖橋ができのは丁度、私が奉職した大正十三年の四月頃でございました。学校の花壇が聖堂の近くにありましたので、毎日子どもたちを連れて行っては、遊んだり、お花をつんだり、聖橋を見たりしたものですから、聖橋は子どもたちにも印象深く心の中にしみていったようでした。それであの聖橋をみんなで作りましょうと提案しましたところ、子どもたちは大賛成でしたので、粘土で作ることにしました。ちょうどその頃、お部屋にサンド・ボックスがありまして、畳一帖ぐらいのですね、その上に砂をいっぱい入れまして、それからお茶の水川を開いて、その上に聖橋をみんなで力を合わせてこしらえたのでございます。今も忘れられないのですが、その時の用務員のおばさんに、私が粘土をあまりたくさん使うので、「あなたの組は、あんなに粘土を使って何をやっているんです」と小言を言われたのを覚えています。そんなふうにして、いつも主題といいますか、テーマと申しますか、そういうことを中心にして生活してきました。

目的を持つということで私が感じたのは、おかあさんたちが、幼稚園に朝送ってきて、「先生、うちの子は今日〇〇をするんだと言うんですけど、どういうことなんですか」とか、「今日は箱で人形を乗せる車を作るんだなど言っているんですけど、どういうことなんでございますか」と聞かれるんですね。そういうこと

で、子どもというのは朝出る時から今日は幼稚園で何をしようという目的を持って来るんだな、目的を持ってやって来ることはとっても望ましいことだということを痛感いたしました。そういうことに勇気づけられまして、つねにテーマを考えて、それを中心にやってまいりました。でも時々は、作ることの面白さにまぎれて子どもたちの心身の発達にかたよりがあってはいけないということを考えて、自分をいましめました。子どもたちにはほんとに好きな遊びをさせながら、バランスのとれた教育をということを常に考えておりました。それから一人一人の子どもの欲求とか個性というものも、忘れないように注意しておりました。

倉橋先生の保育の原理は自由であり自発であるとお講義で伺っていたのですが、その自発について、私は以前からなやんでいました。子どもたちから自発的に保育の課題を出すということはなかなかないんですね。子どもたちから出た自発を中心に保育をすすめるということは、最高だと思うのですが、実際にあたってみますと、私の長い経験でも、子どもたちからの自発は一つか二つ位なんですね。一日の保育でもって、子どもの自発を生かしてと心がけていても、なかなかそういう機会がないんでございます。それである日、倉橋先生に「先生の保育の原理の一つは自発ですけれど、子どもたちの自発から保育を引き出すことはとってもむずかしい。自発はなかなかない」ということを、先生に詰め寄ったことがございます。そうしたら先生は、しばらく考えて「たとえばどういうことですか」とおっしゃるので、具体的な例をお話ししました。「私の受け持ちの子どもたちに、みんなにお話をしてあげましょうと言うと、みんな喜んで砂を払って保育室へ集まるんですけれども、ある一人の子どもはいやだいやだと言って逃げてしまうんです。すべり台のてっぺんまで逃げていってしまう。だけど一人でほっておくわけにはいかないから、だっこしてくると、もう泣いてしまう。だけど仕方がないから、だっこしながら他の子どもたちに話をしてあげるですけど」と申し上げたんです。すると先生は「その泣いた子は後であなたのお話を聞く時に、やっぱり泣いているのか、それとも聞いているのか」とおっしゃったので「もう泣くことは忘れて、目を輝かして聞いてくれました」と申し上げたのです。「うん、それだ。そうなってくれば自発と同じだよ」とおっしゃってくださったんですね。この先生のお言葉をきいて、私はやっと安心しました。今までの長い間のなやみがとけました。子どもたちから「先生、今度はおみこし作りましょうよ」とか「時計屋さんをしましょうよ」ということを言ってくれることってほとんどないんですね。それでこちらが、子どもの興味のありそうなこと、あるいは発達に即しているんじ

ゃないかというようなことを思いまして、子どもに提案すると、子どもはとびついてきますね。これでいいんだなと思って、それからは安心してそういうやり方で、できるだけ子どもの興味のあるものを考えまして、子どもにのってもらって子どもと共にはりあいのある楽しい生活をつづけてまいりました。

このような保育のやり方は、私だけではなく、附属幼稚園の皆さんが、いろいろテーマを考えてやっておりました。たとえば自動車というテーマでひとときをすごしたこともございましたし、おもちゃ屋さん、魚屋さんなどは言うまでもございませんね。汽車という主題で、これは新庄よし子先生が長い間続けてなさいました。

ある時、参観におみえになった方に、こう言われたことがございます。「こういう主題による教育は、お茶の水のように手がたくさんある所、広い所、教材がある所でなくちゃできませんね。私の方じゃ、とうていできません」と。狭いお部屋に五十人もすし詰めになっている幼稚園でしたらあるいは主題による保育はむずかしいかもしれませんが、手がなくても私は充分やれると思います。教材でも、何もお金を使った物でなくても、包装紙でも新聞紙でも、廃物利用でできると思います。

私どもがそういうテーマを中心にして子どもも先生も楽しそうにしている姿を、倉橋先生はいつも見ていて下さいました。そしてご自分でお考えになって誘導保育という名をお付けになったんだと思います。保育活動を生活から誘導するという意味じゃないかと私は解釈しております。先程の坂元彦太郎先生のお話で、誘導という言葉が昭和十八年ぐらいで消えたということですが、誠に私は淋しいことに思います。

現在の幼稚園でも、主題による保育をしていらっしゃるところもございますけれども、幼稚園教育要領が新しくできて、保育学校や保母養成所ができまして、いろいろ教えるもんですから、そういうことに若い先生方はとらわれているんじゃないかというふうに私は考えています。幼稚園の先生はもっと、子どもの純真な姿や言動に、愛情や感動を持って——と言うと教訓的になりますが、子どもの美しさにおどろきをもち、楽しく余裕を持って毎日をすごされたらいいんじゃないかなあなんて考えております。現在の若い先生方は一生懸命やっていらっしゃるんですけれども、少しゆとりを持って子どもの愛くるしさ、美しさを眺めながら、ゆっくりした気持ちで保育をなさったらどうかなんてことを、毎日若い方が懸命にやっていらっしゃるのをみて考えております昨今でございます。

以上で私のつとめをはたさせていただきます。ありがとうございました。